



マンティコアモンを一撃で屠り、土煙を巻き上げながら光とデュナスモンは現れた。

その顔からは、勇太達といた幼い怒気は消え、落ち着きからくる無表情さ…
それは、勇太の死を受け入れた光が望んだものであった。



ファクトリアタウン…それが今の光達と天使達から落ちのびた人間とデジモン拠点であった。
「だから！イビルモンは、私達を助けてくれたんだって!!なんでいつも意地悪するの！」
「宮子、もういいって俺は、こういうの慣れてっから…。」

「だから…っ、その蝙蝠野郎が、てめえらにあの気色悪い化物手引きしてけしかけたんじゃねえかって言ってんだよ！」

「んで、毎回喧嘩腰なんだよ！今はお互い天使と戦う仲だろうが！」

「馬鹿か！そもそもこの状況にしたのもこの悪魔達だろうが！」

「あんた！まだそんな事言ってるの!?!」

「何やってるのあんた達!!!」

光がファクトタウンのゲートに入ると、先程のマンティコアモンから助けた少女、佐藤 宮子とデジモン達が言い争っていた。

光の存在に気付き、宮子は乗っていたグレイモンの頭から降りて光に駆け寄って抱きついて来た。

「光お姉ちゃん！」

「…鬼塚っ。」

宮子というよりも悪魔型デジモン達に、絡んでいたマリブルモンが光とデュナスモンに気付き、一歩引く。

「お前達、また仕事サボってこんな事してるのか。」

「ツチ…行くぞ。」

デュナスモンの睨みに、マリブルモン達はバツが悪そうに退散していった。

「べー!…、あたっ!?!」

マリブルモンを煽る宮子に光はゲンコツを落としていた。

「あんたもよ。」

なに、毎回律儀に喧嘩買ってんのよ。

というか、先に帰って休めって先行ったわよね？」

「だって～。」

「すまん。」

サンドリモンから伝言を頼まれて待ってたんだが、あいつらに絡まれてな…ついつい。」

「たくっ、気持ちは分かるけど、ビリビリした空気って周りに伝わるから気を付かなさいよ？」

「すまん…。」

「で、サンドリモンがなになって？」

「ああ、戻ったら顔を出せて。」



ファクトリアタウンには、携帯機器は少数しか存在しない。
ファクトリアタウンにいるデジモンは特性上、自身に内蔵している機器により連絡を取り合う。
突然の大人数の難民により、増産の対応をして尚、追いつかず現在は何かしらの理由でファクトリアタウン外に出る者にもみ貸し出していた。
ファクトリアタウン内では、固定電話か、今の様な伝言が主とした連絡手段となっていた。

...

「う～す。なんのよ…「光姉ちゃん!!!」ごふ!!?」

「あら、やっとおいらしたの。」

サンドリモン。とその使い魔達は、ファクトリアタウンの中心部、人間が特に多い居住区部分で、親のいない子供、幼年期から成長期の独立できていないデジモンの乳母を行っていた。

特に人間の子供にとっては、重要な役割であった。

天使の街では、より進化を促す人間を文字通り繁殖…無理矢理、次世代に強い種を残すために番わせていた。

それは、現在の人間の価値観では到底受け入れられるものではなく、特に母体となった女性を中心として多くの人間の心は壊れ、自身の肉体的子孫となっても育児をさせるモチベーションを持つ者は少なかった。

そういった子供を一手に引き受けたのがサンドリモンと一分の人間とデジモンであった。

「たく…ガキ共も元気そうね…。」

「子供はお風の子、お元気な子、当然ですわ。」

デュナスモン、ちょっと美空をお頼みますわ。

ほら、みんなデュナスモンのお姉ちゃんがお遊んでくれますわ。」

そうやってサンドリモンは、おんぶしていた赤ん坊をデュナスモンに預ける。

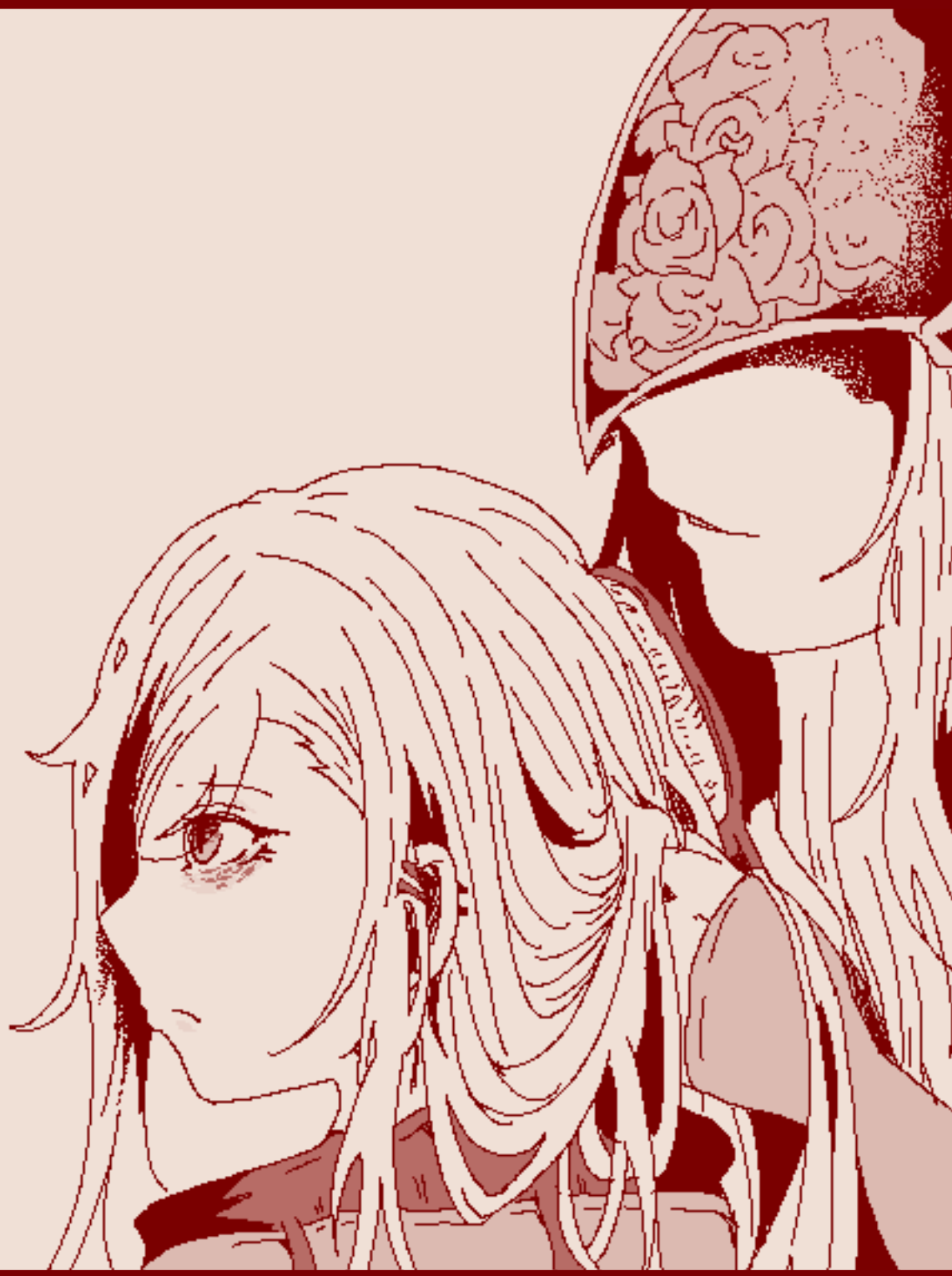
「ちょ…ちょっと待ってくれ、私はこういうのは…というか戦いばかりで子供達に悪影響が…。」

「あら?ご謙遜、こ慣れてるように思えますわ。」

ほら、光こっちにおいらっしやい。」

「ちょっと…なによ急に。」

そうとうとサンドリモンは光を奥に連れて行った。



「…で、こんな事の為にわざわざ呼んだの？」

「あら、こんな事とは、お言い草ですわね。」

お髪は女のお命、あなたは、お確かにお中身はお淑女としては、お程遠いですが、お髪はお綺麗なのだからおボサボサなままなんて、お勿体ないですわ。」

サンドリモンは、光を奥の部屋に連れ込み髪をブラシで梳いていた。

「…別にいいわよ、見せる相手もないんだし。」

「お全く、お外見はお一番お外の中身、お身だしなみが乱れるとお心もお乱れますわ。」

「そんなもん？しかし、ぞっとする光景ね。」

あの唯我独尊オレ様ならぬ私様、暴力婚活女が自分以外の子供の子育て…あだだだ!!!!」

「もうおひとつ、お教えますわ。」

お口は、お災いのものですわ。」

「たく…髪（女の命）全部持ってかれると思ったわよ。」

「ふふ…ねえ、光、勇太様だけじゃない。」

私は、あなた、デビドラモン、ヴォーポモン、アンティラモン、ラセツモン…それに三下 慎平達にお感謝してますわ。」

「なによ急に。」

「宮子は、まだまだ甘えたいお年頃なのに皆んなのお為ってあの子なりにお頑張ってる。」

圭太は、引っ込み思案だけとお守りがとってもお上手ですわ、美空がお泣き出すと私もお中々苦労しますけど、圭太があやすとすぐお泣き止みますわ。」

美空も好き嫌いしないで、おいっぱいお食べる、きっと将来は大きくなりますわよ。」

「…。」

「力だけが今までの私のお指針でしたわ。」

自身とお並ぶものだけを尊ぶ、お弱者がどれだけお群れようが、お強者には及ばぬと。

故に、お存在価値などはない。

でも、あの日あなた達は、お力を合わせる事で私をお打ち破った。

個の強さじゃない、別のお強さで私をお分らせましたのよ？

少し目を開けば、強さだけじゃない尊ぶものがお見えしてきましたわ。

ふふ、あの子達をお見ると毎日、お気づきになるの。

誰かより秀でてるとかお能力の話じゃない、そんなものなくて彼ら…いえ、どんな命でも持っている何か私にはとてもお尊いのだと。」

「…。」

「感謝してますわ。光。」

それに気付かせてくれたあなたにも勇太様達にも。」

結局サンドリモンが何が言いたいのか、光は言語化できなかった。

しかし、感じ取る事は出来た、自身の中で無意識に下がっているように思える自分自身の命の価値。

彼女は自分を労わって、心配している。

分かって尚、それに応える事はできなかった。



「あれから…結構経つわね。」

それは明確な話題逸らしであった。

「ええ、デーモンとの決戦から、もう半年は経ちますわね。」

「違うわよ。」

ヴォーボモンとベルスターモンが出て行ってからよ。」

「ああ…、そうですね。」

あのお馬鹿女はともかくヴォーボモンは、お大丈夫かしら？」

「デジモン達が避難先の話聞いて、こっちに来てるから一応生きてるんだろうけどね。」

しかし、失敗したわね。

天使達は、ここに集中するかと思ったけど案外 DW 全体的に散らばってる。

ひとりで行かせたのは、かえって危険だったかもしれないわね。」

光達がファクトリアタウンに流れ着いて半月が経った頃であった。

ヴォーボモンが勇太との繋がりを感じると言い始め、そして、探しに行きたいと申し出た。

光は、勇太の生存に半信半疑ではなく、一割も信じてはいなかった。

しかし、自分達を追って天使達が来るのであれば、ヴォーボモンを外に逃がすため。

外のデジモン達に避難場所を知らせる役割を与える事で、罪悪感を与えないように逃がした。

ベルスターモンは、それに併せて出て行った。

理由は、飽きたから。ということであった。

「ほんとにお役に立ちませんすわね～～～!!! あのお馬鹿女!!

どうせ、そこらでお喧嘩お喧嘩ですわ! ほんとにお下品!!」

「…ふふ、そう…ね…。」

言い終わる前に光は、倒れた。

「光!?!」

サンドリモンが様子を見ると、呼吸が荒く、発汗し、顔を赤く発熱していた。



デーモンとの決戦からデジタルワールドでは、半年が経っていた。
天使の街から逃げた人々とデジモン達と合流し、天使達の手から逃げるようにソドムの街から南下、機械型のデジモン達の街であるファクトリアルタウンへ腰を落ち着かせた。
しかし、天使達は DW でその勢力を広げて行き、今では、落ちのびたデジモン達の難民先になっていた。



難民が増えたファクトリアタウンの空気は、お世辞にもいいものではなかった。シオンは、それまで天使型デジモンが世界を守護し、それを乱す悪魔型デジモンという意識が潜在的に根付いている。

敵が天使であり、共にいるのが悪魔である状況による認知不協和。

陰謀論と混乱、そしてそこに外部の人間という存在、特に子供は空気を読まずに悪魔達と分け隔てなく接したりすることにより、その溝はより深まり、三者三様の隔たりを産んでいた。



更にその人間自体も問題であった。

外部であり DW の慣習にも慣れておらず、デジモンより身体が弱いというよりも、構造が全く違う。

デジモンはある意味タフで野宿も苦にならないが人間はそうはいかない。

現在も移住先が足りず、外で寝るものも少なくはない。

それに対して優先的な住居の斡旋、警護の必要というコストの面が機械型デジモンの思考としては大きなストレスになっている。

そして、いつ終わるかもしれない天使達の攻撃に、疲弊とストレスで皆苛立っていた。

そして、それを仲裁する中心にいる人物は、DW の破滅の引き金を引いた光とデビドラモンとサンドリモンとデビモン。

自分達を攻撃する天使達の長のひとりであったアンティラモン。

自身を護る存在であるが、同時に口にしない不満も向けられている…いつ爆発するかもしれない「ガス」が充満していた。

光自体も自身に向けられるその空気と論を正論であると受け止めていた。

元来貧弱なその身体に、その意識と過剰な働きにより、精神的、体力的な面での負担が大きく押し掛かり、遂に今に至った。



ファクトリアタウンを囲う天使型デジモン達も荒れていた。

能力の高い究極体（アンティラモンを含む）が4体いるとはいえ、四大竜の内、2体を消費しても尚ファクトリアタウンを落とせずにいる事に、部隊指令塔となっているアルケーエンジェモンは苛立っていた。

手柄を上げ、上位の天使に取り入ろうとする野心の大きい個体であるのがより苛立たせていた。

組織を重んじ、私情を殺すのが天使達であったが、部下達もその空気に当てられていた。「なぜ!あんな街ひとつ落とせないのですか!?マンティコアモンも無駄に消費している!何かしらのタスクに問題があるのではないのですか!?すぐに見直してレポートと提出しなさい!」

そう言うと、爪を齧りブツブツと何かを言っている。

周りに当たり散らかす事で部下の天使達の士気も下がっている。

そんな折であった。

「やっほー☆みんなのアイドル☆ラブリーエンジェモンちゃんだよ☆」

「「…?」」

「…なんですか、あなたは?」

「ブー、みんなノリ悪〜い☆私は、アルケーエンジェモンさんの助っ人に来たんだよ☆」

「…ラブリーエンジェモン、思い出しました。」

その薄ら寒い品のない言動、獣混じりのルクスモンのお友達ですか。

帰りなさい、あなたに頼む事などありません。

獣臭いのが移ります。」

「ひど〜い☆でもダメ!だって、これはオファニモン様からの指令だもん!」

「なっ…そんな!確かに今は苦戦しているが…近いうちに…!そもそもそんな獣なんかに!!!?」

「確認してもいいよ☆でも、安心して!手柄は、アルケーエンジェモンさんのものでいいから☆だから☆今回は私の作戦に従ってね☆」

「…っ。」

野心が高い者は、それに伴う自身の価値、能力があると思っている。

しかし、価値、能力は野心に比例するものではない。

野心のみ…自尊心のみ高い者は、無意識に能力等の低さを感じ、それを守るために周囲に怯え、攻撃的になる。

そして、著しく自尊心を傷つけられると思えばよらぬ凶行に出る…。



「なんだ…きてたの？」

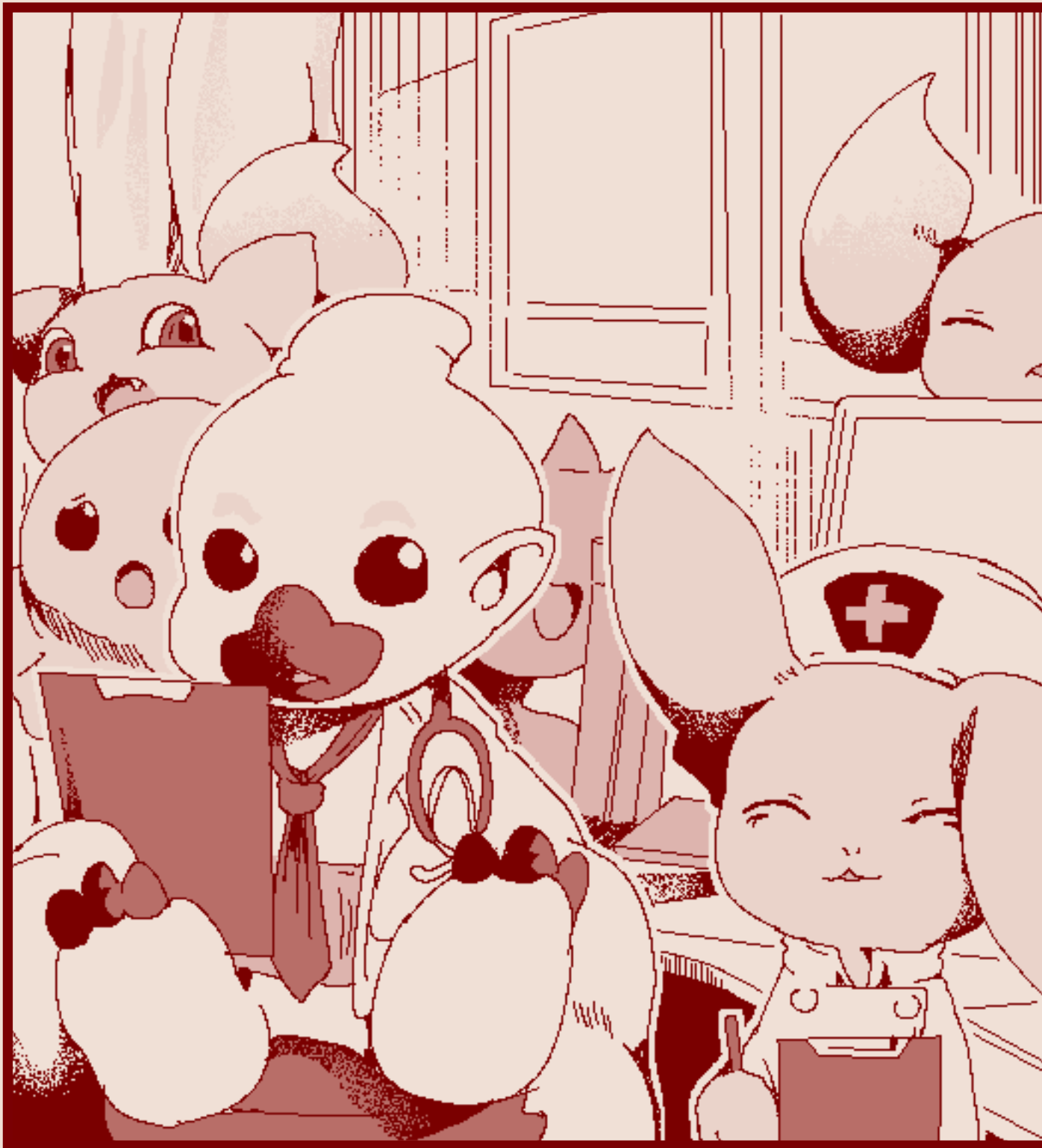
「ああ、なにか欲しいものはあるか？」

「別に…少し休めば大丈夫よ。」

「そうか…じゃあ今はゆっくり休みなさい。」

光は倒れた後、サンドリモンに抱えられファクトリアタウンにやって来たポケモンの診療所へ連れ込まれた。

光が倒れたと聞き、ファクトリアタウンが太古にあった有用な遺物を探していたアンティラモンはすぐに戻って駆けつけた。



「う～ん、病気ではなくて過労じゃのう…。」

光はんは、気の張りすぎじゃったからな。

「まあ、本人は働きたがるのじゃろうけど、ブ叩いてでもベッドで休ませるからの。」
「お大事なのーね、食事はこっちで用意するから、変なもの持ってくるのはやめてほしーのーね。」

栄養がありそうなものを山みたいに抱えているアンティラモンとデュナスモンにネーモンがやんわりとたしなめた。

「では、私達は光になにをしておあげれば…。」

「し…しかしねえ…わ…私は、人参を食べれば元気になるのだがら。」

「なんにもするなのーね。」

「妙なもん喰わせたら頭に注射器ぶち込んじゃるからな。」

「やめろやめろー。」「光しゃんいじめるらー。」

「「…はい。」」

怒られた。



その、瞬間爆発音と衝撃が広がった。

診療所の窓ガラスが衝撃で割れ、破片が飛び散り、デジモン達に降りかかるのをデュナスモンが防いだ。

「なんだ？」

見ると遠方に大きな爆発による煙が浮かんでいる。

「馬鹿な…サンドリモンのガラスのシールドを突き破るなんて…！」

サンドリモンがファクトリアタウンに張っていたガラスのシールドは究極体でも簡単には破壊できるものではなかった。

更に、侵入しようとするはずぐさまセンサーにより警報がなるはずであった。

その理由をアンティラモンはすぐに悟った。

シールドを破壊し、巨大な太陽を思わせるデジモンが、ファクトリアタウンに墮ちようとしていた。

(シールドを破ったのは、あのデジモンから放たれたものか…！侵入のためにか!?)

「私は、すぐにアレを止めに行く！デュナスモンは光のそばにいろ！」

「しかし!!」

「今、その子を守れる君だけだろ!!」

「…っ！」

そう言い残すとアンティラモンは、飛び出して行った。

…

遠方でその光景を天使達が見ている。

「ふふ…ソルメラモンちゃん、ばっちし穴開けてくれたね☆衛星軌道上からの自由落下によりメテオストライク☆

予想通り、威力で厄介なシールドを破って、センサーも掻い潜ったね☆

「ソルメラモンを改造してより制御が効かなくなったゲテモノ…、アレの封印まで解くとは…、アレはあの街全てを破壊するぞ。」

「ふふ…人間とデジモンの確保まで欲張るから手こずるんだよ☆

デーモンを打ち破った連中に、アンティラモン様☆

こっちも殺す気でいかなきゃ☆

それに、今回は皆殺しが目標じゃないよ☆

あくまで、それはサブ目標☆本当の目標は別にあるもん☆

「…。」

意気揚々と語るラブリーエンジェモンの後ろでアルケーエンジェモンは唇を噛んだ。舐められている…アルケーエンジェモンはそれを感じ、遂に凶行に出た。



「酷いな…。」

ソルメラモンに向かうアンティラモンが見たのは屍の山と廃墟であった。

その様相は、デーモンとの決戦と同じ規模であった。

しかも、今回は人間も巻き込まれている。

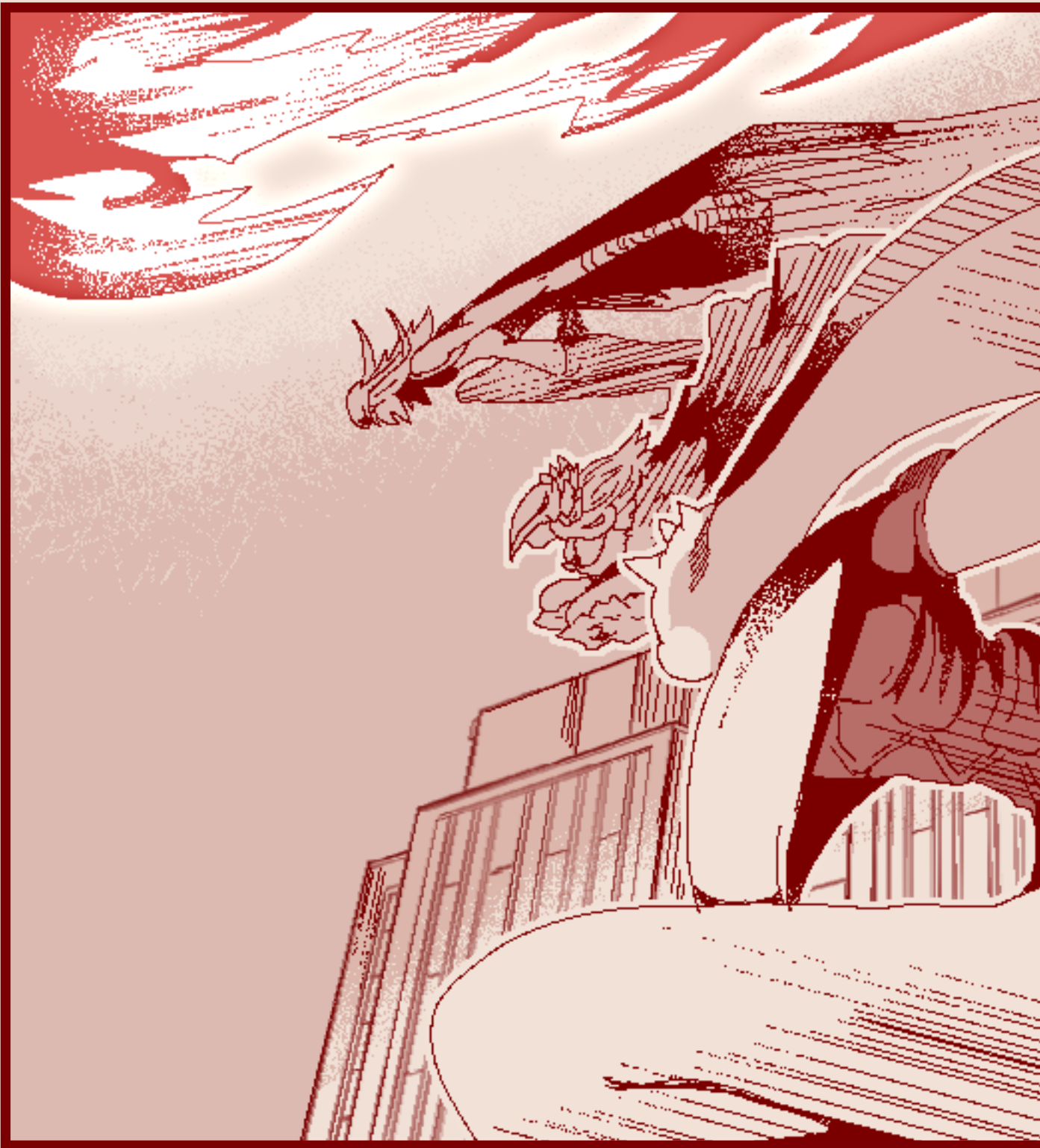
人間はデジモンに比べて言うまでもなく貧弱、被害の割合では圧倒的に人間が多かった。

その状況にアンティラモンは目を細めた。

周囲からは硝煙と焼けた肉の臭いが入り混じり不快なものとなっている。

耳を澄ませると怒号と泣き叫ぶ声も聞こえる。

アンティラモンはそれを全て呑み込み、これ以上の被害を広げない事を決意し、耳を閉ざしソルメラモンに向かった。



(こいつ…まさか!?)

「お気づきましたか!」

アンティラモンが声の方を向くとサンドリモンとネオデビモンがいた。

「目視した当初の落下予想の場所からおずれ初めてますわ!」

「こっちを補足してるのかもしれない!我々を避ける様に動いてる節がある!」

「ちょっと!あなたダンデビモンにお進化して一気にお近づけませんの!!」

「ダンデビモンになると理性を失う…下手したら君達を襲いかねん。」

「お役に立ちませんわね~!!!」

「…。」

(まずい…このままじゃ間に合わない!!!)

他の2人も思ったのか合わせた訳でもなく速度を上げた。

しかし、差は縮まらない。

間に合わないと3人が確信した瞬間であった。



3人を何かがとてつもないスピードで追い抜いた。

「!光!?!」

そこには、光とデュナスモンがいた。

デュナスモンは、ソルメラモンの真下に陣取る。

「あの子…お無茶を!!!」

叫ぶサンドリモンを光は一瞥して呟いた。

「っ…こんな時に寝てたら、勇太達に顔向けできないのよ…!」

デュナスモン!!!!」

「ああ!ドラゴンズロア!!!!!!!」

デュナスモンの腕から発射された光弾がソルメラモンを撃ち抜いた。

「…あれは!?なんだ!?!」

「ソルメラモンをより目的の為に改良したこの子☆
ふふ…いい肥料になってね☆」

撃ち抜かれたソルメラモンは一瞬の収縮を見せた後に、一気に巨大化し継続した光と熱のドームを形成した。

離脱しようとしたデュナスモンは、飲み込まれその姿を消した。

形成されたそれは、まさに地上の太陽であった。

